

[翻 訳]

『スペクテイター』(7)

——第56号から第65号——

門 田 俊 夫

第56号 1711年5月4日(金曜日)

【アディソン】

愉快的考え違い。(ルカヌス)¹⁾

アメリカ人²⁾は人間だけでなく獣や植物を含めて生き物にはすべて、いな、木の切株や石ころといったどう考えても生命のないと思えるものにまで、魂が宿っていると信じています。彼らはナイフやボートや鏡のような人工のものにも魂があり、こういったものが壊れて使えなくなったときには、それらの魂も人々の靈魂が住む来世の一員になるのだと信じています。そのため、彼らは常に、亡くなった友の死体の傍らに弓矢を添え、現世同様に、来世でその魂を使用できるようにするのです。こういった考えは非常に馬鹿げたものに思えるかも知れませんが、我がヨーロッパの賢人たちもそういった全くあり得ないと思われる考えを主張して来ました。特にプラトンの門弟の中には、イデアの世界について語るとき、実体と本質は漂浪の、空想的な存在だと言う人がいます。同様に、アリストテレス学派の人たちの多くも、実体については曖昧な言い回し方をして来ました。ここではただひとりアルベルトゥ

1) ルカヌス (39-65) 『ファルサリア』 1. 459. 『ファルサリア (内乱賦)』は、カエサルとポンペイウスの抗争と共和政の末路を描いた未完の叙事詩。

2) アメリカインディアンについては第50号参照。

ス・マグヌス³⁾だけを例に引いておきます。この人は、天然磁石に関する論文で、火が磁力を奪うのだと述べています。彼は燃え盛る石炭の中で磁石が真っ赤になっているのに目を留め、磁石から青い蒸気のようなものが発生しているのに気づいたと語っています。この蒸気が「実体」、つまり、西インドの人たちの言い方をすれば、天然磁石の「魂」であるかも知れないと彼は信じたのです。

アメリカ人たちの間には、同胞の一人が幻となって深遠な魂の安置所、つまり、私たちの言う来世に降りて行き、そこから帰って来て、死者の世界で目にした一部始終を友人たちに克明に語って聞かせるのだという言い伝えがあります。以前にも触れました私の友人の一人は、アメリカインディアンの首長たちの通訳を説得して、この件に関してどんな言い伝えがあるのか首長たちから聞き出しました。彼が数度にわたってあれこれ質問をして分かったことは概ねつぎのようなことでした。

マラトン⁴⁾という名の予言者は、うつろな山の麓を延々と旅した後、やっと精霊の世界の境界まで辿り着きました。でも、そこはイバラのやぶが複雑に絡み合った深い森であったために、入口が分からず、中に入ることが出来ませんでした。森の中に入り込むための小道を探して辺りを見回しているそのとき、巨大なライオンが一头森のそばにうずくまっているのが眼に入りました。ライオンは獲物を待ち構えているときと同じ姿勢で彼をじっとにらみました。このインディアンは驚いてすぐさま後ずさりしましたが、ライオンは素早く立ち上がり彼に飛び掛かって来ました。武器は一切ありませんでしたので、彼は身をかがめて大きな石を拾い上げました。だが、彼がとても驚いたことに、空をつかんだのです。石だと思っていたものは実は石の幻にす

3) アルベルトゥス・マグヌス (1193-1280) は、ラティスボン (別名レーゲンスブルク) 司教、中世スコラ神学の大家で、トマス・アクウィナスの師とされる人物。彼の著作集21巻は1651年ライデンで出版された。

4) マラトンという名前は、イギリスを訪問した4人の王のうち、二人には「トン」という名前がついていたことと関係があると推測される。

ぎなかったのです。彼は一面がっかりしましたが、他方では非常に喜びました。彼の左肩をとらえていたライオンには彼を傷つける力は備わってなく、貪欲なライオンの幻にすぎないことが分かったのです。彼はすぐさま無力なライオンを払いのけ、森へ向かいました。そして、しばらく様子を伺い、ほかのところよりも若干まばらになっている箇所から森の中に分け入ろうとしました。そのとき再びとても驚いたことに、やぶは一切邪魔にならず、まるで自分が広々としたところを歩いているかのように、楽々とイバラのやぶを歩いているのに気づいたのです。要するに、森全体が幻の森にすぎなかったのです。彼はたちどころにこのイバラのやぶの茂みは森が封じ込めている靈魂のための一種のフェンスつまり生垣の役目を果たしているのだと考えました。そしてまた、彼は、靈魂の柔らかな実体なら、この不思議なトゲやイバラはもういものであって、おそらく生身のからだは一切傷つけられることはないだろうと思いました。このように考えながら、彼はこの複雑な森の中を進んで行きました。次第に辺りから香りが漂ってき、先へ進むにつれてだんだんその香りが強く、また、甘美になってきました。しばらく進むうちに、イバラのやぶが途絶え、実に素晴らしい香りを放ち、色とりどりの花をつけた美しい緑の木々で覆われた場所にやって来ました。そこは芳香の漂う原野となっており、彼がこれまで通って来たごつごつした情景との境界になっていました。この魅力的な場所を進んで、平地になっているところにやって来たとき、彼は馬に乗った人たち数名が彼のそばを駆け抜け、そのすぐ後から犬の一群が吠えながら走って行くのが見えました。間もなく、若者を乗せた一頭の乳白色の馬の幻が、ものすごい速度で逃げる野兎の幻を追い詰めて行くビーグル犬の一群の靈魂の後から全速力で疾駆して来るのが見えました。乳白色の馬に跨った若者が彼のそばまで来たとき、若者の顔をまじまじと見てみると、彼は半年ほど前に死亡した若きニカラグア王子であるのが分かりました。この王子はとても高潔な人物であったため、当時、アメリカの西部一帯では誰もがその死を嘆き悲しんでいたのです。

彼は間もなく森を抜け出て、花の咲く野原、緑の草地、小川、陽の当たる

丘、日陰の谷間といった景観に迎えられました。この景観は彼自身の口では表現できない、いな、彼に言わせると、誰にも表現できないほど素晴らしいものだということです。この幸福な地帯には夥しい数の靈魂が住んでいました。彼らは思い思いに、運動をしたり遊んだりしていました。輪投げ用の輪の幻を投げているものがいるかと思えば、弓の幻をほうっているもの、馬の幻を飼いならしているものもありました。大多数のものは「死去した道具」の幻を使って器用に手仕事をしていました。インディアンたちは自分たちの道具が燃えたり壊れたりすると、インディアンの言葉で「死去した道具」という名前を付けているのです。この愉快的光景の場所を進んで行くとき、彼は絶えず、自分の国では今までに見たこともないほど多種多様に、周囲一面に咲き乱れている花を摘み取ってみたいという衝動に駆られました。だが、すぐにこういった花は眺める物であって、触れることが出来ないのだということに気づきました。彼は最後に大きな川のほとりに辿り着きました。彼自身魚釣りが得意でしたので、しばらく堤に立って、沢山の魚の幻を釣り上げている釣り人を眺めていました。魚の幻は釣り人のそばであちこちで飛び跳ねているのでした。

読者のみなさんに言うておくのを忘れていましたが、このインディアンはその昔、国一番の美人と結婚し、子供が数名出来たのでした。この夫婦はいつも変わらず愛し合っていたことで有名になっており、今でも、インディアンたちの間では、結婚するときには、マラトンとヤラティルダのようになりますようにと願を掛けるほどなのです。ところで、マラトンが釣り人のそばに立ってしばらくして、最愛のヤラティルダの幻がいるのに気づきました。彼女は彼が気づくまで、しばらく彼をじっと見つめていたのでした。彼女は涙を一杯浮かべて、彼の方に両手を差し伸べていました。彼女の表情、両手、声は彼を呼んでいました。でも、川は渡れないのだと彼に告げているようでした。最愛のヤラティルダを目にしたときのこのインディアンの心に沸き起こった喜び、悲しみ、愛情、欲望、驚きの入り交じった情念を一体誰が口に出して描写することが出来るのでしょうか。彼はただ涙で語るだけでした。彼

女を見つめながら、涙は彼の頬をとめどなく流れ落ちるのです。彼は居たまれなくなって、目の前に横たわっている川に飛び込みました。そこは川の幻に過ぎず、彼は川底を歩いて対岸にまで辿り着いたのです。彼が近づくと、彼女は彼の胸に飛び込んで来ました。一方、マラトンは彼女との抱擁を妨げている自分の肉体が溶けてしまえばいいのにと願いました。双方あれこれと問いかけたり親愛の情を交わしたりした後で、彼女は花の咲き誇る一帯で見つけて来たものを使って自分の手で奇麗に飾ったあずまやに彼を連れて行きました。マラトンが言語に絶するほど美しい彼女の住まいに呆然とし、至る所から漂って来る芳香にうっとりしていると、ヤラティルグは貴方をお迎えするためにこのあずまやを準備しているのですと言いました。そしてまた、貴方の神への敬いの気持と人々に対する誠実な接し方のお陰で、貴方の命が尽きたときは必ずこの幸福な場所にいらっしゃるものと思っていますと言うのです。それから、彼女は数年前に亡くなり、この素敵なあずまやと一緒に暮らしている子供二人を連れて来ました。そして、彼と一緒に暮らしているほかの子供たちも、後に家族全員がこの幸福な場所で一緒に暮らせるようによろしくお願いしますと言いました。

この言い伝えによりますと、彼はさらにその後、道徳的に邪な人たちの死後に割り当てられている陰惨な住まいを見たということです。そしてキラキラ輝く金の海には、金を手にするために夥しい数の気の毒なインディアンを斬り殺した野蛮なヨーロッパ人の魂が投げ込まれていたということです。ところで、すでにこの言い伝えの肝腎な点は触れましたし、紙幅も限られていますので、本日はこのあたりで終わりにしたいと思います。

第57号 1711年5月5日（土曜日）

【アディソン】

あの胸には一体どんな羞恥心が宿っているのか。

戦争に慣れ、女性であることを投げ捨てているのか。

（ユヴェナリス）¹⁾

ホメーロスの『イーリアス』の中で、妻から自分が関係している戦いのことで話し掛けられたとき、戦いのことは自分に任せておいて欲しいと願うヘクトールは、妻に侍女たちのもとに行き、糸つむぎに精をだしなさいと告げます。²⁾ このことは、男性、女性はそれぞれの本分、つまり男性は男性の、女性は女性の本分に相応しい仕事に力を注ぎ、相手の領分に口を差し挟むべきではないということをホメーロスは暗示しているのです。

私はこのところ、人生の大半を育児室で送り、折りに触れてコードゥルやミルク酒³⁾をイングランドの男性の誰よりも上手に作ることが出来る若い紳士と知り合いになりました。この紳士はまた、キャンブリック⁴⁾や綿モスリンにとっても詳しく、砂糖菓子のことなら1時間ぶっ通して喋ります。彼は毎晩、街や法廷で見掛けたことを、例えば、どのご婦人が一番素敵なお洋服を着ていたとか、一番立派な髪を着けていたのは誰だったとか、誰のリンネルが最も上等だったとか、最も素敵なかぎタバコ入れを持っていたのは誰だとか、その他詮索好きな諸々の論評をして、母親を楽しませているのです。

一方、私はこの冬に町に出て来た田舎のアンドロマケー⁵⁾をよく見掛けま

1) ユヴェナリス『諷刺』6. 252-3.

2) 『イーリアス』6. 490-3.

3) コードゥルはかゆに卵、砂糖、香辛料、ワインまたはビールなどを入れた温かい産婦や病人用の滋養飲料。サックはスペイン産シェリーやカナリーワイン。

4) キャンブリックは牛乳をお湯で薄め、砂糖と時に紅茶を加えた温かい小児用の飲み物。

す。彼女は田舎ではキツネ狩りの名手の一人なのです。この女性が口にする話題は猟犬や馬のことで、また、彼女は柵6段を平気で飛び越えます。男性がふざけた話をする、彼女は馬鹿にしてその男性を一突きし、恥知らず者呼ばわりをします。召使が仕事をおろそかにすると、屋敷からたたき出すぞと威嚇します。私は、激怒した彼女がある裕福な商人に向かって卑劣な犬呼ばわりをしているのを耳にしたことがあります。そしてまた、ある日、彼女がある人物の名前が思い出せなかったとき、大勢の紳士淑女のいるところで、その人のことを肩幅の広いその方と呼んでいたのを覚えています。

それぞれの本性にそぐわないこういった話し振りや行状が男女逆から生ずる場合に滑稽に見えるとすれば、他方に移植される一方の欠点や欠陥は陰悪で不自然なものに見えるのです。男性に関しては、本日の紙面ではこれ以上述べませんが、私は神の創造物の中で一番美しいものである女性を申し分のない存在にするために貢献し、造物主が女性にふりそそぐ魅力を押しのけて台頭しようとするきずや汚点はどんなささいなことであってもすべて払拭して欲しいと考えていますので、本日の紙面はそのために費やしたいと思います。私がここで明らかにしたいと考えています汚点とは、最近いつのまにか会話の中に入り込んでいるパーティーでの憤怒のことです。憤怒というものは、本来、男性にありがちな欠陥であり、生来女性に備わっている柔和さや謙虚さといった親愛の情を感じさせる特質に対抗するさまざまな怒りや邪陰な激情から成り立っているのです。女性は男性の気持ちを和らげ、慰めて、穏やかさと同情心を抱かせるために造られたのであって、男性を苛立たせ、その結果沸き起こって来る激情を爆発させるために造られたのではないのです。これまで可憐な口元から中傷や罵倒の言葉が発せられる場面に遭遇したとき、私はとても大きな戸惑いを覚えたものです。とても美しい顔がパーティーでの憤怒で蒼ざめ打ち震えているのを見掛けたとき、私はどれほど気をやきも

5) 『タトラ』第37号に、「ヨークシャーの狩りをする女性アルス・コップスウッド夫人」との記事が掲載された経緯があった。アンドロマケとはギリシャ神話に登場するヘクトールの妻。

きさせたことでしょう。カミーラは英国では最も美しい女性の一人ですが、双方から祝杯を受ける人物というよりは、パーティーの女丈夫としての自分に誇りを抱いています。1週間ほど前、この親愛なる女性がテーブルの向かいの気性が荒く美貌のペンテシレイア⁶⁾といさかいを起こしました。そしてカミーラが怒り狂わんばかりになっていたそのとき、たまたま、指をやけどしたうえ、自分のペティコートにお茶をこぼしたのです。この偶然の出来事で口論が中断しなかったら、いつまで口論が続いていたかは誰にも分かりません。

女性の読者のみなさんに真剣に助言したいことがひとつあります。女性のみなさんにはそれを重く受け止めて戴きたいものと考えています。要するに、その助言とは、パーティーに対する熱意ほど顔に有害なものはないということなのです。この熱意に取りつかれると、目つきは意地悪くなり、顔つきは不快になります。おまけに、顔はこわばり、顔色はブランデーの色よりももっと赤くなります。ある女性がそれまで面識の無かったある高貴な貴族と話をしているとき、女性の顔が怒りで紅潮するのを見掛けたことがあります。実際、私はパーティーに出掛ける女性で年中美しさを保ち続けることが出来る人に出会ったことはありません。そこで、女性は顔を大切にするわけですから、我が女性の読者のみなさんには、この種の口論には口を差し挟まないようお勧めします。とはいえ、母のような老齢の方々の場合は、どうぞ心置きなく激怒して戴いて結構です。なぜなら、そういった方々は激怒しても顔を台無しにしたり、また転向者を獲得したりする危険性もないでしょうから。

私は男性はパーティーで激怒し、不快で卑劣になることがあると思いますが、女性はあまりにも正直であるために、沈着さと思慮深さを発揮して女性の生来の傾向である怒りを和らげることが出来ず、男性には必須の慎重で控え目な行動が取れないのだと思います。この異様な熱意に取りつかれますと、女性は抑制の出来ない激情に駆られ、無茶な言動をすることになります。物

6) カミーラは女兵士で、ペンテシレイアはトロイを助けたアマゾンの女王。

惜しみしない女性の心はとめどない愛あるいは憎しみへと向かいます。その対象がホウィッグであれトーリーであれ、ペットの抱き犬であれ洒落者であれ、オペラであれ人形芝居であれ、激情が女性にとりつき、彼女たちを夢中にさせてしまうのです。

タイタス・オーツ博士⁷⁾が得意の絶頂にあったとき、私は友人のウィル・ハニコムに同行して彼の知合いのあるご婦人のもとを訪問したことがあります。私は腰を掛けると直ぐに、室内を見回しました。すると、至る所に大小いろいろな博士の肖像画があるのに気づきました。そのすぐ後、彼女が友人と話を始め、かぎタバコ入れを手にしたとき、タバコ入れの蓋にもなんと博士の顔が描かれていたのです。このしばらく後、彼女がハンカチを手にしてそれを広げたとき、そこにもまた博士の肖像があったのです。このとき、からかうのが大好きな友人のウィルは「もしトゥルーラブ氏（これが彼女の夫の名前）の代わりにその方が描かれているのであれば、ご主人はさぞやオセロのようにハンカチのことで心がやすまらないことでしょうな。」と彼女に言いました。すると、彼女は「ハニコムさん、貴方はトーリーなの。本当のことを言って下さらない。貴方は博士の味方なのそれとも敵なの。」と言いました。ウィルは彼女の質問には応えず、彼女の顔を見ながら微笑み（実際、彼女は大変な美人）、つけばくろがひとつ落ちかかっていますと言いました。彼女はすぐさまそれをなおし、少し真剣な表情で、「貴方とそこにいらっしゃる寡黙なお友達は本当はきっと博士の敵に違いないわ。何もおっしゃらないところから見て、その疑いを強くしましたわ。」と言いました。そして、彼女は扇を手にした。扇を広げるとまたまた博士の肖像画⁸⁾が

7) タイタス・オーツ (1649-1705) は1679-80年のカトリック陰謀事件の頃に活躍した英国国教会の聖職者。だが、ここで述べられている「博士」はヘンリ・サシェヴェレルのこと。1710年に行なわれた彼の裁判は民衆の支持を得て、これがホウィッグ内閣失墜へとつながった。裁判中は、とりわけトーリー支持派の婦人方に人気があった。

8) トーリーの選挙運動の一環として、1710年の夏には、サシェヴェレル博士の肖像を描いた扇が販売された。

登場するのです。博士は堂々と扇の真ん中に陣取っていました。要するに、博士がこのご婦人の頭の中も、そして家具類もほとんどすべてを占拠していたのです。無理やり意見を求められる雰囲気になりましたので、私は友人に暇乞いをしようと目配せをしました。という訳で、二人してそのご婦人のもとから逃げ出して来たのです。

第58号 1711年5月7日（月曜日）

【アディソン】

詩は絵のようなものだろう。（ホラティウス）¹⁾

機知ほど、称賛もされますが、その割りに理解されないものもあります。私の知る限りでは、公然と機知について書き記した著者は誰もいません。若干触れている著者はいますが、彼らにしても偶然入手したことを、それも根本には立ち入らずほんの少し論じるか、一般的な美辞麗句をならべるだけに留まるのです。それゆえ、私が詳細に論じれば、我が同国人のために満足のいく仕事が出来るとはならないかと考えている次第です。「崇高」について卑屈な調子で論文を書いた人物に対して、ある有名な批評家が下した非難²⁾と同じ非難を私自身が受けたくない形で論じたいと考えています。私の思考が遮断されて乱れないように、この1週間は丸々この仕事に専念する積りです。読者のみなさんが1週間私に注目した戴ければ、おそらく来週の土曜日の夜までには、ロンドンの町はもっとましな方向に向かうのではないかと考えています。内容は誰にでも理解出来るように述べる努力をしますが、読者のみなさんはかりに少々分りにくい箇所遭遇しても、自信をなくさないで欲しいと思います。なぜなら、つぎにはもっと易しくなりますから。

私の思索の最大でかつ唯一の目標は、グレートブリテンの領土から悪徳と

1) ホラティウス『詩の技法』361.

2) 古代ギリシャ末期のロンギノス（217-273）はシシリアの修辞学者を主張にそぐわないお粗末な書き方をしていると批判した。

無知を一掃することですので、私は私たちの間に洗練された著作に対する審美眼が行き渡るよう全力を尽くします。そのために、私はこれまでオペラと悲劇に関していくつかの問題点を披露してきたのです。そして、これから先折りに触れて喜劇に対する私の考えも伝えたいと思っています。そうすることで喜劇がより洗練され、卓越したものになっていくと考えるからです。私が出入りしています書籍商によりますと、ユーモアなどについての評論を載せた新聞は、テーマの割には、実際に私が期待した以上の好評を博しているようです。そこで、非常に気をよくしてこの仕事に取り組みたいと思います。

本日ならびに今後1, 2回は偽りの機知の歴史の足跡を辿り、それぞれの時代に流行した機知の特徴をいくつかご紹介します。この前の冬、これまで長い間文壇では論破されていた例の古臭い様式の機知が復活する兆しが伺えましたので、私は現時点で足跡を辿っておくことはこれまで以上に必要なことだと考えています。といいますのは、諷刺や賛辞がアクロスティック³⁾で行なわれたのです。野心を抱いたどう見ても愚かとしか思えないような人が、これを駆使して洗練された著者気取りで文章を作りはじめたのです。そこで、著者が優れた才能の持ち主なのではなく、単に大変な勤勉家であることを示す偽りの機知のいろいろな手管について詳しく述べることにします。

私が見掛けました偽りの機知のうちでまず最初に気づく種族は、古色蒼然としたものであり、まさにイーリアスの時代であるかのような作品をいくつか生み出しています。ギリシャの二流詩人が書いたような短い詩のことを言っているのです。これらの詩の形状は、「卵」や「翼」や「斧」や「羊飼いの笛」や「祭壇」の形に似ています。⁴⁾

卵の形状につきましては、これは卵の形に似た詩であり、当然のことながら「学者の卵」と呼ぶことが出来ます。私はその卵をふ化させる、つまり、

3) 各行頭(行末・中間)の文字をつづるとある語になる詩。一種の文字なぞ。

4) この種の形状をした詩は、イギリスでは、16世紀に見られる。パトナムが『イギリス詩の技法』(1589)で取り上げている。

もっと分かり易く言えば、その卵を英語に変えたいと思います。これはその解釈がそれほど難解でないとしてもそうなのです。というのは、そういった詩の作者は詩の意味よりも詩の形状に執心しているように思えるからです。

翼の場合は12の行というか羽から成っています。各行は翼の形に従って長さがだんだん短くなって行きます。(他の詩の場合と同じように) この詩のテーマはその形状と少し関係があります。なぜなら、この詩はいつも翼をつけて描かれる恋愛の神のことを描写するからです。

斧については、私が思いますに、刃が辛辣な諷刺で出来ている場合には、斧は諷刺文にとって格好の形状だったことでしょう。だが、原作を見る限り、私はそれはミネルヴァに捧げられた斧、そしてトロイアの木馬を作るときにエペウス⁵⁾ が使用したと思われる斧の銘以外のなものでもなかったと考えます。私は指摘するにとどめ、あとは批評家の判断に委ねたいと思います。銘は、今日の刃物師がナイフに刻印を記すように、元々斧に記されたのだと私は考えているのです。そしてまた、そのために斧そのものが失われても、銘が古びた形で残っているのだと思われます。

羊飼いの笛は音楽がみなぎっていると言えるかも知れません。なぜなら、これはそれぞれ別個の9行で構成されており、長さがこの詩のテーマでもある古楽器の9つの指孔に似ているからです。

祭壇にはヘカペーの息子トロイラスの墓碑銘が刻まれています。ところで、これを見ていると、私はこういった偽りの機知はそれが広く影響を受けた著述家たちよりもはるかに古いのではないかと思わされてしまいます。少なくとも私はテオクリトス⁶⁾ ほどの立派な作家にはそのようなつまらない作品は書けなかっただろうと思います。

こういった仕事で成功を収めるには、いわば、画家あるいは少なくともデザイナーでなければ不可能です。まず最初に、書こうとするテーマの輪郭図を描き、その後でその図をテーマの形状に適合させるのです。詩は嵌め

5) 『アイネーイス』2. 264.

6) テオクリトス (310?-250B.C.) はギリシャの田園詩人。

られる鋳型によって縮められたりふくらまされたりしたのです。要するに、詩の行は用意されている額縁の大きさ次第で短くされたり、延ばされたりしたのです。つまり、詩は暴君プロクルーステース⁷⁾に鉄の寝床に寝かされた人々の運命を味わうことになったのです。彼らは、足が短すぎる場合には引き延ばされ、長いと一部を切り取られ、彼が用意した寝床に合うようにされたのです。

ドライデン氏はこういった時代遅れの機知について、彼の詩『マック・フレクノー』の中でそれとなくあてこすっています。この詩は上述したような翼や祭壇の形状の詩があることを知らない読者には理解することは出来ません。

あなた自身のために、アクロスティックの国のどこかに
平穏な地方を見つけ出すのです。その地でなら、
あなたは翼をひろげ、祭壇を掲げ、ひとつの可哀相な言葉を
好きなように苦しめることが出来ます。⁸⁾

この偽りの機知は前世紀の数名の詩人たちによって蘇ったのです。特に、ハーバート氏の詩⁹⁾や私の誤解でなければデュ・バートスの翻訳¹⁰⁾にその復活が伺えます。現代の詩人たちの間では、これまでに述べてきたことに似ているとすれば、あの有名なチャールズ1世の絵¹¹⁾に勝るものはないと思います。聖書の詩篇全編がチャールズ1世の顔の輪郭と頭髮の中に書き込まれて

7) ギリシャ神話で、捕えた旅人を鉄のベッドに寝かせ、ベッドよりも長い足は切り、短い足は引き延ばしたという強盗の名。

8) 『マック・フレクノー』205-8.

9) ジョージ・ハーバート(1593-1633)はイギリスの形而上派の詩人であり司祭。彼には、1633年に出版された『聖堂』『聖なる詩と私的な禱り』という詩集がある。

10) ヨシユア・シルヴェスターによる『神聖な日々と労働』(1608)の翻訳には、「字なぞの王」への献辞がある。

11) サミュエル・ソルビエールはオックスフォード、セント・ジョン・コレッジを訪れたとき、巨大な羽目板のある回廊に、髪の毛は聖書の言葉で、詩篇がラテン語となっているチャールズ1世の肖像画を目にした。

いるのです。私はこの前オックスフォードへ行ったとき、片方の頬ひげを熟読しましたが、同行していた友人たちがその珍奇な作品を見るに耐えられなくなったために、もう片方は熟読出来ませんでした。それ以来、現在では、ロンドンに旧約聖書全文を長い鬘の中に書き写した卓越した書き手がいると耳にしました。その人は、数年前に流行した毛深い鬘が蘇るなら、予備の髪の毛を二つ三つ付け加えて聖書外典を書き込むと請け合っています。元はいえ、彼はウィリアム王のためにこの鬘を考え出したのです。列王記の上下を鬘の前髪におさめたのです。だが、鬘が完成するまでに誉れ高い国王が亡くなったために、顔の部分はそれを購入する人のために残されたままとなっているのです。

ところで、生半可に詩をかじっている現代の人たちのために、古代の詩に帰って、この独創的な意匠を考え出した古典作家の同業者たちの模倣をすることをお勧めします。私はこの考えを知合いの詩を愛する若者に伝えました。彼は恋人に扇の形の詩を捧げようとしているのです。そして、彼の語ることに偽りがなければ、すでにその詩は扇の骨の3本目まで完成しているとのことです。彼はまた、恋人の薬指のサイズにピッタリの指輪の形をした銘を作るためにどうしても彼女の指のサイズを手に入れるのだと私に断言しました。何気ない助言を拡大解釈することはよくあることですので、頭の良い我が読者諸兄諸姉が私の言ったことをその他多くの点に適用されるのは確実なことでしょう。そして、またたくまに、ロンドンには、韻文で書かれた肩衣、ハンカチ、かぎタバコ入れやその他似たような女性の装飾品があふれることでしょう。それゆえ、ピンダロス風の書き手¹²⁾を自称している我が国のあっぱれな作家は、長さや規模の点でも他の詩人たちに勝っているようですので、ただちにこの種の機知を適用なさることのないよう一言助言して本日の紙面を結びたいと思います。

12) ピンダロスは紀元前5世紀頃のギリシャの抒情詩人。韻律を凝った詩を書いたといわれる。

第59号 1711年5月8日(火曜日)

【アディソン】

彼らは苦心して無為でいる。(セネカ)¹⁾

人は誰でもチャンスさえあれば才人になるのだということほど確かなことはありません。深遠で堅実だと触れ込んでいる銜学者は、よく洗練された作家の作品を「誇示」だとか「空言」だといってけなすのですが、彼らも全員、折りに触れて、骨身を惜しまず彼らが軽蔑していると思える人たちと同じことをするものです。このため、私たちはしばしば彼らが創作には限りない苦しみを伴う空想的な作品の完成に向かって努力しているのを見掛けます。この真相は、しばしば天才というよりは大変な博識家の作家たちが創作した苦心の作によって肩書が貰えるとしたら、才人というよりはむしろ「ガレー船を漕ぐ奴隷」の方がいいということなのです。

昨日の紙面では、古典作家たちの中に伺える偽りの機知について若干述べましたので、本日は読者にその当時栄えましたその他二、三の種類についてお知らせします。最初に呈示しますのは古代の「リポグラマトイスト」²⁾つまり「ある文字を脱落させて書く作家」のことです。この人はゆえなくある特定のアルファベットに異議を唱え、詩の中に一度たりともそのアルファベットを用いないようにするのです。トリフィオドロス³⁾という人物はこの種の達人でした。彼は24巻からなるユリシーズの冒険に関する叙事詩『オデュッセイア』をアルファを完全に追放して彼の第1巻を書いたのです。この第1巻は(名称とは矛盾するのですが)アルファがないので『アルファ』と称されました。彼の第2巻は同様の理由から『ベータ』と呼ばれました。要するに、この詩人は順次24文字を追放したのです。そして、その文字がなくても

1) セネカ『人生の短さについて』13. 1.

2) リポグラムとはある種の文字あるいは語をすべて排除して作詩する方法。

3) トリフィオドロスは紀元前5世紀中頃のギリシャの文法学者兼叙事詩人。

仕事は出来るのだということを明らかにしたわけです。

トリフィオドロスが価値なしと見放した文字を追放し、音節の関係からどうしても避けられないような場合には、ギリシャのいくつかの方言を使ってその文字から逃げているさまを目にするのは、別の詩人が単に長さだけを競わないようにしているのを見掛けるのと同じように、とても愉快なことだったに違いありません。というのは、言語の中で最も適切で気品のある言葉が、間違った文字を使用するとそこなわれると思える場合には、まるで傷のあるダイヤモンドのように、その言葉が退けられたからです。この件で一言っておきたいことは、もしここで述べています作品、つまり、トリフィオドロスの『オデュッセイア』が現在も残っていましたが、その作品は、おそらく、我が国の学識ある哲学者たちによって、ホメーロスの『オデュッセイア』以上に引用されていたに違いないということです。この作品は、すたれた言葉や語法、尋常でない破格の言葉や粗野な言い回し、馬鹿げたつづりや複雑な方言について大変なうんちくを傾けていたのです。私はこの作品が最も貴重なギリシャ語の宝庫のひとつと見なされていたことは間違いないと考えています。

同様に、古代の人たちの中に、現代の人たちが「判じ絵紋」⁴⁾と呼んでいる独創的な奇想を発揮した人がいます。判じ絵紋とは、文字一字だけにとどまらず単語そのものを退けて絵で代用させるやり方のことです。カエサルは貨幣鑄造の責任者だったときに、貨幣の裏面に象の絵を配置しました。「カエサル」という言葉は古代カルタゴ語で「象」という意味があった訳です。これはカエサルが巧妙にもくろんだことだったのです。なぜなら、一私人が国の硬貨に自身の姿を刻印するのは違法だったからです。キケロは、一族の長

4) カムデン『ブリテンの遺風』(1605)の「判じ絵紋、名前の工夫」に、ここに述べられている実例が載っている。アディソンは「古代のメダルについての対話」の冒頭で、現存する美しい彫像として、マルクス・アウレリウスの騎馬像、ファルネーゼのヘラクレス、メディチのヴィーナス、ベルヴェデーレのアポロンの四つを挙げている。

の鼻にラテン語でいう「キケル」つまり「エジプト豆」のような小さなこぶがあったためにその名がついたのですが、記念碑には「マルクス・テューリウス・キケロ」ではなく、マルクス・テューリウスの後にエジプト豆の絵を刻むようにと指示しました。こうしたのは、おそらく、ライバルたちから妬まれてしばしば揶揄されていたのですが、彼は自分の名前や一族のことを恥ずかしく思っていないのだということを示そうとしたためでしょう。同様に、名高い建物の一部に「カエル」や「トカゲ」の絵が刻まれているのを見掛けます。ギリシャ語のこういった単語は、国の法律で、自分たちの作品に自分の名前を刻むことが許されていなかった建築家たちの名前だったのです。これと同じ理由から、古代のマルクス・アウレリウスの騎馬像の馬の前髪が、離れてみると「フクロウ」の形になっているのは、おそらくはアテナイ人だったと思われる彫刻家が自分の母国をほのめかすためだったのだと考えられます。この種の機知は、我が国では、一ないし二世代前にとても流行しました。この時には、古代の人たちのような婉曲的な意味合いではなく、純粋に機知のためだったのです。数え切れないほどあるこの種の例の中で、学識あるカムデン⁵⁾の『遺風』に述べられているニューベリー (Newberry) 氏という人物の趣向を呈示したいと思います。ニューベリー氏は自分の名前を絵で表現するために、枝に果実 (berry) 数個がついたイチイの木 (Yew) の標識板をドアにつるし、果実の間にアルファベットのNを金文字で大きくつけ加えたのです。その結果、つづりは少々ややこしいのですが、Yew-berry ではなく N-ew-berry となった訳です。

最近、フリーストーンに刻まれ、ブレナムの邸宅⁶⁾の二つの入口に建てられた判じ絵紋を紹介してこの話題についての話は終わりにしたいと思います。

5) 『ブリテンの遺風』(1674年編) 556頁。ウィリアム・カムデン (1551-1623) はイギリスの好古家、歴史家。ニューベリー氏は1767年に死亡した児童書出版業者。

6) この時にはまだ未完成。建築はサー・ジョン・バンブルー (1664-1726)、彫刻はグリーンリング・ギボンズ (1648-1721) が担当した。

この判じ絵紋とは獐猛なライオンがニワトリを引き裂く図なのです。我が国の読者にこの趣向を理解して戴くためには、ニワトリはラテン語では「薄命」と「フランス人」という意味を持つのだということ、そして、ライオンは「イングランドの紋章」であることをお知らせしておかなくてはなりません。このように堂々とした建築物でのこの種の趣向は、まるで英雄詩における地口のようです。実に独創的な建築家の優れた設計が、彫刻家のためにこのようなお粗末な奇想で台無しにされるのを私はとても残念に思います。私が申しましたことでニワトリに慈悲をかけて戴き、ニワトリがライオンの前足から救い出されると有難いのですが。

古代にはまた、エコー（こだま）に分別のあることを言わせ、理屈に合った返答をさせるという奇想があります。これが誰か作家に許されるとしたら、それはオヴィディウスでしょう。彼は『変身物語』の中で、エコーを単なる声になってしまう前のニンフとして紹介します。⁷⁾ 学識のあるエラスムスは、才人であり非凡な才能の持ち主でしたが、この馬鹿げた趣向についての対話詩を作る際に、並外れた語学の達人だったと思われるエコーを活用しました。なにしろ、エコーは相手に合せて、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語で応答するのですから。⁸⁾ ヒューディブラスは、この種の偽りの機知を揶揄して、孤独なエコーに熊をなくしたことに對して嘆き悲しむブルーインを描写しています。⁹⁾ エコーは二行連句を書くバトラーにとって大いに貢献します。なぜなら、彼女はただ彼の言うことを繰り返すだけでなく、彼の詩作を手伝い、同じ韻を踏む語を提供するのですから。

彼は、怒り、ひどく取り乱した、ヒュラスをなくして

悲嘆に暮れる頑健なヘラクレスのごとく。

7) 『変身物語』 3. 356ff.

8) 『打ち解けた対話』（リヨン、1533）490から492頁。

9) 『ヒューディブラス』 1. 3. 183-220. ヒューディブラスはサミュエル・バトラー（1612-80）の同名の諷刺詩の主人公で、長老教会派の頑迷な保安官。

谷間に反復するよう強いた、彼の悲嘆の言葉を。

彼は胸を打ち、髪の毛をかきむしった

親しい友の熊がいなくなったことで。

空ろな大地からこだまする

憂いに沈んだ彼の嘆きの声が

さらに一層沈んだ調子で、幾たびとなく

平凡な詩人たちの不格好な押韻詩よりも効果的に。

彼女は哀れな話に韻を踏んで応答する。

そして、とても恥知らずに供述する

彼女がなにひとつ知らないことを。

そして、彼女があらん限りのことを口にしたとき

恋人の恋慕の情によってねじまげられる。

彼は言った、ああいずこへ、邪なブルーイン

あなたは消え失せたのか、エコー、滅びたのか。

あなたは身動きひとつするのさえ拒んだのだと

私は思った、恐怖のあまり。(エコーは言った)

まあ、私はあなたの肩を持つためにここにいるのでは。

それなら、どうしてあなたの強情な心は鎮まったの。

あなたの起こす諍いで、この骨身をどれほど削ったことか

頭から血を流したこともあったではないか。

私がこれまでにひるんだり渋ったりしたことが

あるとでも言うのですか、あなたのために。

(彼女は言った) お黙りなさい。

お皿に盛られないと思ったとき、

あなたは背を向けたのでは。エコーは言った、お黙りなさい。

あなたが打ち負かしたものからこのように

臆病風を吹かせて逃げ出すとは。エコーは言った、お黙りなさい。

でも、どうしたわけで、あなたはあなたの敵からだけでなく

私からまでも逃げ出そうと言うのですか。

私のことを、また、あなたのために私が耐え忍んで
きたことを、あなたがこれっぽっちも想っていなかったとしても
恥ずかしく思う気持と名誉を重んじる気持さえ備わっていれば
このように恐れをなして逃げ出すことはないでしょう。
なぜって、名誉のためなら血を流すことを厭う人は
誰ひとりいないのですから。彼女は言った、まあよくもそんな。

第60号 1711年5月9日（水曜日）

【アディソン】

蒼ざめて食事もとらずに立ち去るのはこのためですか。

（ペルシウス）¹⁾

洗練された時代には消え失せた偽りの機知が、修道士たちの無知がはびこる時代にまたいくつか蘇りました。

修道士たちは当時のささやかな学問をつかさどっており、また、彼らの生活は仕事をする必要はまったくありませんでしたので、より高尚な業績をあげようとしたものが時間も能力もさして必要のない小手先の文章を書くのに多大の時間をかけたことはなんら不思議ではありません。私はその暗黒時代の才人のひとりが『アイネーイス』を半分ラテン語の押韻詩に翻訳しているのを見掛けたことがあります。この才人は序文で『アイネーイス』のようなものを完璧なものにするにはまさしく律動の香りを備える必要があったのだと語っています。また、私は聖母マリアに対する六歩格でできた賛美歌を見ることがあります。それは *Tot, tibi, sunt, Virgo, dotes, quot, sidera, Caelo.*（ああマリア様、あなたは空の星の数ほどの美德をお持ちです）というわずか8語からできているにすぎませんが、それが全編を覆っていました。²⁾ この

1) ペルシウス（34-62）『諷刺』3．85.

詩人はこれらの8語に耳を傾け、彼の詩句を、これが祝福する美德や星の数と同じだけ、調子の美しいものにしました。時間を持て余している人たちがすたれている偽りの機知を復活させただけでなく、それぞれの創作でその世界を豊かにしたことにはなんら不思議はありません。今日、ただ単にある単語から別の単語への変換、つまり、同じアルファベットの組み合わせで異なった言葉を作り出すことにほかならないアナグラムつまり「字なぞ」というものがあるのは、まさにこの時代のお陰なのです。要するに、字なぞとは、この種の組合わせを司る運命の女神の采配ひとつで、夜を昼に、黒を白に転ずることが出来ることなのです。³⁾ 私は、ある機知に富んだ作者が、この種の著述を暗に指して、歪んで手足がきちんとあるべきところがない(と思われる)好敵手のことを「ひとのアナグラム」⁴⁾と呼んだのを覚えています。

アナグラム作者がアナグラムを考え出す場合には、まず、これを探索に何時間も費やしてはじめて宝物にありつくような未発掘の鉱山と考えます。なぜなら、ひとつの言葉に潜んでいる別の言葉を見つけ出し、アルファベットを可能な限りありとあらゆるように組み合わせて吟味するのがアナグラム作者の仕事だからです。私は、この種の機知が流行していたとき、これでもって思いを寄せている女性のハートを射止めようとしたある紳士のことを耳にしたことがあります。この女性はその当時最も洗練された女性のひとりであり、名前を Mary Boon (メアリー・ブーン) といいました。この紳士はメアリーという文字をどうすることも出来ず、勝手に「Mary」を「Moll (モル)」に変更し、半年間というものの根気よく部屋に閉じこもって、アナグラムの制作に取り掛かりました。そのアナグラムを差し出された女性は、自分の名前がモル・ブーンに格下げになっているのを見て内心少々面白くなく、この紳

2) イエズス会士の詩人ベルナール・ファン・バウフィゼンの『警句集』(アントワープ, 1616)。

3) 「アナグラム、置換された詩」についてはパトナムが論じている(1589年)。カムデンもまた『ブリテンの遺風』でアナグラムを扱っている。

4) 誰がこの言い回しをしたのかは判明していない。

士がとても驚いたことには、私の姓を間違っていると思いますね、なぜって、ブーンはブーンでも私の姓のつづりは Boon ではなく Bohun なんですものと言ったのです。

希望はすべてむなしい煙となって消え失せた。

長年の労苦は一瞬にして水の泡となったのだ。⁵⁾

この紳士はこの不幸に仰天し、たちまち正気を失ったのです。そうでなくても、それまでずっとアナグラムに精力を傾注してきたことで彼の感覚はひどくそこなっていたのです。

いずれの考案者の方が、間が抜けていたとは決め難いのですが、アクロスティック（文字など）もまたおそらくアナグラムと同じ時期に考案されたのでしょう。単純なアクロスティックはただ単にいくつかの詩句の頭文字でこしらえ、中国風に縦書きにした人物の名前ないし事物の名称にすぎません。でもこのほかに、複雑なアクロスティックもあり、その場合は、主要なアルファベットが二重三重の意味を持つのです。私は詩句が行毎にある名前で縁取られているだけでなく、同じ名前が詩行の中間でもまるで縫い目のように張り巡らされているアクロスティックを見たことがあります。

アナグラムとアクロスティックの縁戚関係にあたるものに、もうひとつ普通クロノグラム（年代表示銘）⁶⁾と呼ばれているものがあります。この種の機知は、今日のメダル、とりわけドイツのメダルにしばしば登場しています。メダルが鑄造された年代を刻印するときにこの機知が用いられるのです。例えば、グスターウ2世⁷⁾のメダルには、CHRISTVS DUX ERGO TRIVMPHVS（キリストのご加護で勝利をおさめる）という言葉が見えます。この言葉の中からいくつかアルファベットを拾い出して、並べ替えると、このメダルが

5) ウェルギリウス『農耕詩』4. 491-2.

6) 年代表示銘は17世紀に現れたと考えられる。ジェイムズ・ヒルトン『年代表示銘、5千』（1882）『年代表示銘続編』（1885）参照。

7) スウェーデン王グスターウ2世（在位1611-1632）は、最後で最大の宗教戦争といわれる、いわゆる30年戦争に介入し、1632年11月16日、リュッツェンの戦いで戦死した。

鑄造された年代の MDCXVVVII つまり1627が見つかります。このアルファベットは他のものと区別し、目立つようにしていますので、文字としてまた図案として二重の意味を持つのです。ドイツの熱心な才人たちはこういった巧妙な銘句ひとつを考え出すために辞書一冊を調べ尽くすことになるでしょう。彼らはある適切な古典の用語を探していたのだと考えられますが、実際にはそうではなく、L (50) やM (1000) やD (500) が入っている単語を探しているのです。従ってこういった銘を見掛けるときには、私たちはそこにひとつの考えを期待するというよりはむしろ年代を探すことになるのです。

「題韻詩」⁸⁾ というものが、一時、フランス人に人気があり、誰もがこれに機知と知識を降り注いだことがあります。題韻詩とは、ある人物が互いに韻を踏む単語のリストを作成し、詩人に差し出し、その詩人がリストに載っている順番に韻に合わせて作った詩のことです。韻が珍しいものであればあるだけ、詩人はそれだけ非凡な才能を求められたのです。私はフランス人の間で競われた（一般に帝政の衰微の結果として起るのですが）この種の愚かな機知の復活に向けての努力ほど機知と知識が衰退した例は知りません。読者のみなさんがその具体例を探す手間をはぶくために、最近の「メルキュール・ガラン」⁹⁾ をのぞいてみます。この雑誌では、執筆者が毎月、翌月号の読者に通じるように、巧妙な人たちが作成する題韻詩用の韻のリストを掲載するのです。今手元にある昨年の11月号には「ロリエール、ゲリエール、ミュゼット、リゼット、セザール、エタンダール、ウレット、フォレット」という単語が載っています。メナージュほどの学識のある人物が、この種のささいなことをつぎのように真剣に語っているのを知れば、驚かれるに違いありません。¹⁰⁾

8) 題韻詩 bouts-rimes という言葉は、この箇所が OED の初出。

9) 「メルキュール・ガラン」は1672年にフランスで創刊された月刊誌で、文学、演劇、韻文、散文などの情報を掲載した。1710年から1714年にかけて、編集者はシャルル・リヴィエール・デュフレスニという人物であった。

「ドゥ・ラ・シャンブル氏の語るところによれば、自分がペンを手にする時には、何を書こうとするのかは分かっていなく、いつも文をひとつ書くとその文につられてつぎの文が生まれてくるのだということでした。私はどうかと言いますと、私も詩を書いているとき、つぎにどんなことを書くかは分かっていないのです。私は、まず最初に、韻をすべて取り出しておき、その後、往々にして三ないし四ヶ月かけて完成させていきました。かつて、私は「アマリス、フィリス、マルン、アルン」といった韻を用いたこの種の作品をゴンボー氏に見せて、彼の意見を求めたことがあります。彼はその場で、私の詩は何の役にも立たないと言いました。私がそのわけを尋ねますと、それは韻があまりにも陳腐で、詩を作り易いからだということでした。おやおや、かりにそうであっても、私には私が払った努力には十分な報いがあるのですよ、と私は言い返します。ゴンボー氏には申し訳ありませんが、彼の酷評にもかかわらず、詩はとても結構な出来だったのです。」以上は学識あるメナージュの言葉を翻訳したものです。これに関しては『メナジアーナ』¹¹⁾を参照して下さい。

題韻詩というものは、元々フランスのご婦人方が恋人に課したものですから、作る側にしてみると、ある意味では申し訳の立つものでした。だが、上記のような権威のある著者が自らに課す場合には、これほど馬鹿げたものはほかにはないでしょう。また、その著者が仲間と共謀して相手をだまし、韻のリストをこしらえてはじめて詩を完成させたのだとは誰も信じないでしょう。

この種の偽りの機知については、私は、サラザン氏が「題韻詩の敗北」という詩の中で巧みに嘲笑しているのだということだけ付け加えておくことに

10) フランスの批評家ベール (1647-1706) はジレ・メナージュ (1613-92) のことを「当代きっての学識者であり、17世紀のウェアロ」と呼んでいる。ウェアロ (116-27B.C.) はローマ最大の学者といわれた。

11) 『メナジアーナ』の初版は1693年。この箇所は1715年の第3版によると、ii. 355-6に出ている。ドゥ・ラ・シャンブル (1594-1669) は王の侍医で、『人間を知るコツ』の著者。ゴンボーはフランス学士院設立 (1635年) 当初からの会員、1666年死亡。

します。¹²⁾

この題韻詩には「へぼ詩」に用いられ、広く無知な読者にほめそやされている「重韻」¹³⁾ というものがあることを追加しておかなくてはなりません。このようにして作詩した二行連句がいい出来栄であるとしても、韻は関係ないのです。そしてひどい出来でも、そこに用いられる韻のせいではないでしょう。比類なき『ヒューディブラス』を称賛する人々の中には、実際に称賛に値すべきことに対してではなく、以上述べてきた「へぼ詩」のせいである人が多いのではないかと私は危惧しています。『ヒューディブラス』全編の中では、いくらでも素晴らしい箇所があるのですが、「説教壇、教会のドラムは、ばちではなくこぶしで打たれた。』¹⁴⁾ や「ある古老の賢人がいて、彼はアレキサンダー・ロスの書いたものを読んだことがあった。』¹⁵⁾ といった箇所がしばしば引用されているのは確かなことですから。

第61号 1711年5月10日(木曜日)

【アディソン】

実は、実体のないものをあるようにみせるだけの
取るに足らぬもったいぶったことで紙幅を埋める
のは私の真意ではありません。(ペルシウス)¹⁾

偽りの機知の中で、単語の語呂合わせで出来ており、一般に「地口」²⁾ とい

12) ジャン・フランソワ・サラザンの言葉は、メナージュが1656年に活字にした。

13) ビシュの『イギリス詩の技法』では、重韻は英雄詩で用いられるのはまれであるというドライデンの意見を引用し、抒情詩や笑劇では効果を発揮するというビシュ自身の考えを述べている。

14) 『ヒューディブラス』1. 1. 11-12; 1. 2. 1-2.

15) アレキサンダー・ロス(1590-1654)は、チャールズ1世付きのスコットランド人牧師であり、『パンセピア、宗教概説』を著わした。

1) ペルシウス『諷刺』5. 19-20.

2) 地口のことは、『タトラー』第32号では「蘇った大きな過ち」といい、『スペクテイター』も概ね偽りの機知の一例にすぎないと捉えている。

う名前で知られているものほど、あらゆる時代の物書きに気に入られたものはほかにはありません。実際には、生まれ易い土壤となっていますものを根絶やしにすることは不可能です。地口の種はすべての人々の心の中に宿っています。そこで、理性や内省や分別によって抑えることが出来ていても、これはしばしば技巧の法則に乱され啓発されることのない偉大な才能に触発されて芽を出して来ることになるのです。私たちにとって模倣は自然なことであり、それが詩歌、絵画、音楽あるいはその他の崇高な芸術心を育まない場合には、しばしば地口やこじつけの形となって爆発するのです。

アリストテレスは、彼の『修辞学』の第11章で、特に彼が「パラグラム」³⁾と呼ぶ二、三の地口について論評を加え、ギリシャの偉大な作家たちの中からいくつかその例を取り上げています。キケロの著作にも地口が散りばめられています。彼はこの書物の中で弁論の規則を規定し、調べてみまして、完全な地口である機知に富んだ言い回しをふんだんに盛り込んでいます。⁴⁾ ところで、地口が大いに栄えたのはジェームズ1世の時代でした。⁵⁾ この学識のある君主自身が相当な洒落好きであり、主教も枢密院議員たちの中にも、ことあると、地口で異彩を放つ人たちがいたのです。そういうわけで、その当時には地口がものものしくかつ威厳を持って出現したのでした。それまで、地口はもともと愉快な話や滑稽な文章で受け入れられていましたが、今や、説教壇から厳粛に伝えられたり、枢密院の会議の席でとても威厳を込めて発せられたのでした。とても偉大な作家たちも、真面目な作品の中で、しばしば地口を用いました。アンドリューズ主教⁶⁾の説教やシェイクスピアの悲劇

3) 『修辞学』 3. 11. 7. パラグラムは OED では「文字あるいは文字群を変化させる一種の言葉遊び」と定義されている。

4) 『弁論家論』 2. 61-63.

5) 「学者君主」の銜学については、ポープの『銜学迂人列伝』(1728)に言及されている。ジェームズ1世の「悪魔論」「タバコ撃退論」などは1616年に、ウィンチェスター主教ジェームズ・モンタギュによって編集発行された。

6) ウィンチェスター主教ランスロット・アンドリューズ(1555-1626)のこと。彼の説教はあまりにも形而上的で機知に流れすぎるとの批判があった。

には地口が散りばめられているのです。不信心者が主教の地口を聞いて悔い改め、シェイクスピアの場合は、主人公が悲嘆に暮れながら、12行ものセリフを洒落のめしているのを見るのは珍しいことではありません。

こういった偉大な大家たちがこういった偽りの機知をある程度是認するようになったのは、修辞法を重んじる文人たち全員が地口をととても大切に扱い、そのいくつか言葉のあやと考えられるきちんとした名前をつけ、話法の飾りとして推奨したことがあったからだ、私は付言しておかなくてはなりません。かつてある地方の知り合いの先生が当代きっての短評執筆家とされている紳士と同席したことがあると私に語ったのを思い出しました。聞いてみますと、私の学識ある友人は洒落好きで名高いスワン氏⁷⁾と食事を共にしたのでした。私がスワン氏の会話はどうでしたかと尋ねましたところ、総じて彼は「掛けことば」そして時折「反復法」を駆使するということでした。でも、友人の率直な考えでは、「対偶法」が最も光彩を放っていたということでした。

私はここで我が国の著名な大学⁸⁾にかつて地口が大変横行していたのだということをおおざりにしておいてはいけないと考えますが、これはこの大学が立地していた、今では乾いている沼地のせいでそうなったかどうか、その真偽のほどは、もっと判断力のある自然誌家の裁断に委ねなくてはなりません。

以上地口の歴史を簡単に振り返ってみますと、そしてとりわけそれが古代の教養ある著述家たちの著作にしかるべき場所を確保していたことを考えますと、現在どうして学識者たちの世界からすっかり追放されているのか不思議に思われることでしょう。この理由を知るためには、著述の偉大な英雄たちであった第一級の著者たちに批評の法則および技巧が欠けていたということを検討しなくてはなりません。そのために、彼らは天賦の才そのものとい

7) 地口の得意な「律義なスワン氏」については、ドライデンが『諷刺について』(1693)で触れている。

8) ケンブリッジ大学のこと。

う点では後世の著者たちより勝っているのですが、正確さや的確さという点においては劣っているのです。現代の著者は絶妙といった域までは到達できませんが、欠陥を排除することは可能なのです。著述の世界に第一級の著者が出そろったときには、そこに先人たちの作品に関する論評で名声を獲得する一連の作家が生まれたのです。何種類かの機知を技巧という点から区別し、それを真理に即して完成度を考究するのは、こういった派生的に生まれた著者たちの仕事のひとつでした。従って、イソクラテス、プラトン、キケロといった著者たちでさえ、いくつかの欠陥が指摘されたのちにペンを持った彼らよりはるかに劣った著者には見つからないようなささいな欠陥があるのは少しも不思議なことではありません。古代の著者たちの中で、地口と真の機知とをきちんと区別した人はクウィンティリアリスとロンギノスだけだったと私は思います。でもこの区別がいったんなされてしまうと、ごく当然のごとく分別のある人はみんなそれを納得したのです。この偽りの機知の復活に関しては、それはたまたま文芸復興の時期と重なったのでした。だが、偽りの機知は、正体を見破られると、またたくまに消え失せたのです。疑問の余地はないのですが、偽りの機知というものは、ある時代に姿を消し、また別の時代に姿を見せるものなのですから、これは、ちょうど銜学や無知が機知と分別に勝るように、忘れた頃再び蘇ることでしょう。実を言いますと、昨年冬の商品がいくつか高く評価されたのをみますと、私は、我が子孫は二、三年すると洒落好きの人種になってしまうのではないかと心底危惧している次第なのです。少なくとも、通人たちの間に「文字など」が密かに伝わり称賛されているのを見た人物がこの種の危惧を抱くのは当然のことかも知れません。そしてまた、読み方によっては呪いとなったり、祝福となったりするのですが、前から読んで後ろから読んで詩句となる「魔女の祈り」という短い「警句」があることも付け加えておかななくてはなりません。実際我が国の才人たちの中にそのようなことに労を厭わない人がいるのを見ると、そのことがどんな結末をもたらすのかは誰にも予測できません。お互いを切磋琢磨しなくてはならないとしたら、堂々と機知と諷刺の鞭を駆使することに

しましょう。というのは、私は、いずれ苦しまないといけないとすれば、ロバの足よりライオンの足の方がましだという古代の哲学者の意見に賛成だからです。⁹⁾ 私は党派性を意識してこんなことを言っているのではありません。党派は双方ともどうしようもないほど沈滞しています。私が見るところでは、トーリーは「アクロスティック (文字なぞ)」でホウィッグは「アナグラム (つづり換え)」なのです。双方がトーリーとホウィッグではなく、アクロスティックとアナグラムであるために、両者の意見がかみ合わないのです。

さて、地口に話題を戻します。すでに地口の歴史をその起源から没落まで辿ってきましたので、ここでは地口とは音は同じでも意味が異なる二語を使用することから生じる奇想と定義することにします。従って、機知であるかどうかを判断する唯一の方法は、それが真実であると判断できるものがあれば、異なった言語に翻訳してみることなのです。翻訳してみて機知が消滅するようであれば、それは単なる地口だったのだとの結論が下せます。要するに、地口は、ある人物が夜鳴鶯について語ったように、「単なる音」¹⁰⁾ と言えるかも知れません。一方、真の機知は、アリステネトゥスが美しい女性について語ったときに用いた「衣服をまとっているときも美しく、裸になったときも美しい」¹¹⁾ という描写、つまり、メルセラスが力強く翻訳したように「ある物を着せても美しく、露にしてもまた美しい」という描写で説明できるかも知れません。

9) 『イソップ寓話』14.

10) プルタルコス『倫理論集』233A「スパルタの格言」。ロバート・バートン『憂鬱の解剖』(1621)にも引用されている。

11) 『メナジアーナ』参照。

第62号 1711年5月11日（金曜日）

【アディソン】

正しい文章を書くには源泉が肝要である。（ホラティウス）¹⁾

機知と思慮分別の違いについては、ロック氏が実に見事な考察をしています。彼はこの両者が必ずしも同一人物の才能にはならないとするその論拠の呈示に努めています。ロック氏は「このために、おそらく、機知に富み正確な記憶力を備えている人物が必ずしも常に透徹した思慮分別、つまり、洞察力のある理性の持ち主とは限らないというあたりまえの所見に対して若干の論拠を提出することが可能である。機知というものは、大半が観念の集合体の中に横たわっており、迅速かつ多様に肩を寄せ合っているのである。そこには、想像の世界で楽しい絵や好ましい見方を構築するための類似点や一致点を見出すことが可能である。一方、思慮分別というものは、それとは対極にあり、両者を入念に識別するときには、その観念にはごくわずかの違いしかない。そのため、直喩や類似性に惑わされて、両者を取り違えることはないのである。これは隠喩や引喩とは全く正反対の行動形態をとることになる。そこにはたいていの場合、想像力に活発に働きかける機知のもつ楽しみが横たわっている。従って、すべての人々に受け入れられることになるのである」²⁾と述べています。

これは機知に関して私がこれまで目にした中で最も優れたそして哲学的な考察だと思います。機知というものは、通常、必ずしも常にというわけではありませんが、ロック氏が述べるように、観念の類似点や一致点にあるのです。補足説明として、私は、観念の類似点というものが読者に「喜び」と「驚き」を与えない場合には、それは機知とはいわないのだということを一言申し添えておきます。この二つの特性、とりわけ後者の「驚き」という特

1) ホラティウス『詩の技法』309.

2) 『人間悟性論』2. 11. 2.

性は機知にとって不可欠に思えます。従って、観念の類似点が機知となるためには、その観念があまりにもあたりまえのことでないことが必須となります。なぜなら、明らかに類似している場合には、驚きがないからです。ある人物と別の人物の歌を比較すること、あるいは、ある物体の白さをミルクや雪で、また、多様な色彩を虹で描写することは、この明白な類似点以外に、さらに一步その両者の観念に読者に何らかの驚きを与えることができる何か一致点が伺えないと、それは機知とは呼べません。例えば、ある詩人が恋人の胸は雪のように白いと語るときには、そのたとえには機知はありませんが、彼がため息まじりに、彼女の胸は雪のように冷たいと付け加えると、そこには機知が伺えるのです。³⁾ 読者めいめいの記憶力にその類の数多くの例が蘇ってきて、詩人の不足分を補うのです。従って、目新しくかつ驚きを与えるもので楽しませるのではなく、壮大な着想で満たそうとする英雄詩の詩人の直喩には機知と呼べるものはめったに伺えません。短い解説の付いたロック氏の機知に関する考察には、隠喩、直喩、風喩、なぞ、題辞、たとえ話、寓話、夢、夢想、劇的な著作、笑劇、その他さまざまな引喩が包含されています。機知に関してはほかにもいろいろありますが、(一見前述の記述とは掛け離れているように見えても) 吟味してみますと、それに賛同することになるでしょう。

真の機知が、通常、観念の類似点と一致点にありますように、偽りの機知はもっぱら、アナグラム、年代表示銘、脱字、アクロスティックのような単一の文字の、そしてまた、反響やへば詩の韻のような音節の、また別のときには、地口や駄洒落のような単語の、そしてまた、卵や斧や祭壇の形に造られた文章や詩全体の類似点や一致点にあるのです。それだけに留まらず、機知の概念を単に表面的な物真似にまで及ぼし、ある人物を雰囲気と身構えあるいは顔が似ている聡明な人物と考える人までいます。⁴⁾

3) エイロフ大尉の「最近グリニッジ・パークで見掛ける美人たち」に、この比較をした二行連句(カブレット)がある。

4) ヘンリ・バーカーは『礼節をわきまえた紳士』(1704)で「卑屈でこびへつ

前述の例からしますと、真の機知は観念の類似点にあり、偽りの機知は単語の類似点にあるわけですが、部分的には観念の類似点、部分的には単語の類似点といった別種の機知もあります。他者と識別するために、私はこういった機知を「混在した機知」と呼ぶことにします。この種の機知は、ほかの誰にもましてカウリーにふんだんに伺えます。また、ウォラー氏にも目立ちます。ドライデン氏はきわめて控え目です。ミルトンはそれ以前に非凡な才能がありました。スペンサーはミルトンに匹敵します。⁵⁾ イタリア人の場合は、叙事詩にまでこの種の機知があふれています。古典詩人たちをお手本にしたボワロー氏はことあるたびにこの種の機知を軽蔑して排除しました。ギリシャの作家たちの中で混在した機知を探してみると、エピグラム（警句）作家以外には見つからないでしょう。実際、ムーサエウスの詩には若干この種の機知が伺えます。⁶⁾ これが他のもろもろの特色とともに、現代の文章に顔を出しているのです。古代ローマの作家たちを調べてみますと、ウェルギリウス、ルクレティウス、カトゥルスには混在した機知は一切なく、ホラティウスにはあったとしてもごくわずかで、オウィディウスにはふんだんに伺え、マルティアリスにはまれです。

無数にある混在した機知の中から、この種の作家たち全員に共通する実例をひとつ取り上げてみます。⁷⁾ 恋愛の情熱は従来その性質上火に似ていると考えられてきました。そこで、愛を表明するために、火とか炎という言葉が

らっている才人のひとつの型」としてただ単に面白がって笑いを引き起こそうとする人物を挙げている。

- 5) アディソンは初期の詩「偉大なイギリスの詩人たち」(1694)の中で、エイブラハム・カウリー (1618-67)、ジョン・ドライデン (1631-1700)、エドモンド・ウォラー (1606-87)、ジョン・ミルトン (1608-74)、エドモンド・スペンサー (1552?-99) たちを扱い、カウリーの欠点は「機知が勝ちすぎている」ことだと述べている。
- 6) 「ヘーローとレアンドロス」はウィンタートン『ギリシャのマイナーな詩人たち』に入れられている。
- 7) 以下に述べられる混在した機知の例は、カウリーの詩集『恋人』(1647)から取られている。

用いられます。従って、機知に富んだ詩人たちは火という怪しげな言葉を利用して、無数の名言を作ってきました。恋人の視線に愛を生み出す力と同時に冷やかさを認めるカウリーは、恋人の視線を氷でできた集光レンズと考えます。そして、愛の極みに生き長らえることができている自分を発見して、その灼熱地帯を住むのに適していると判断します。彼は恋人が自分がレモンの汁で書いた恋文を火にかかげて読むときには、愛の炎を通して二度読んで欲しいと願います。彼女が涙を流すときには、それが涙を蒸留させる内なる熱であって欲しいと願います。彼女の姿が見えないときには、温度は華氏80度以上になります。つまり、彼女の姿を目にしているときに比べると、30度北極圏に近づくわけです。燃え盛る彼の恋情はもちろん燃え上がる火であり、幸福な愛は天上の光であり、不幸せな愛は地獄の炎なのです。眠りにつけないときは、煙を出さない炎となり、思慮と忠告の妨害が入るときには、吹き付ける氣息によって一層猛威を振るう火となります。恋心を刻み付けた木が枯れるのを見ると、彼は自分が書き記した炎がその木を燃えあがらせ枯らしたのだと言います。恋を断念する決心をするときには、彼は自分のように焼き焦がされた人間は永遠に火を恐れることになるのだと言います。彼の心はエトナ山のようなものであり、火と鍛冶の神ウルカーヌスの仕事場に代わってキューピッドの鍛冶場を囲い込みます。恋を酒で紛らそうとする彼の努力は、火に油を注いでいるようなものです。彼は愛の火は(幾多の生き物を生み出す)太陽の火のように、暖めるだけでなく生み出さないといけないのだと恋人にとりいります。別人の愛は彼の火で焼き焦がします。この詩人の心は胸のうちを知らされ凍てつくときもあれば、眼差しで焼け焦げるときもあります。まるで、大海の真っ只中で火事にあった船のように、滂沱の涙を流すときもあれば、愛の炎に包まれるときもあるのです。

こういった例を見てきますと、読者はこの詩人が火の特性と愛の特性を結び付けているのに気づかれるでしょう。そして同時に、情熱と実際の火を用いて語るその調子に、この種の著述の機知を作り上げているうわべの類似点あるいは矛盾点があるのを発見して驚くことでしょう。というわけで、混在

した機知とは、地口と真の機知を混合したものであり、類似点が観念あるいは言葉にあるときに、概ね満足するものになるのです。混在した機知は土台を一部は偽りに、一部は真実に置いているわけです。つまり、理性がその半分を要求し、残りの半分を放縦が占めているのです。従って、この種の機知の本分は、エピグラムつまり本来一連のエピグラムにすぎない取るに足りない副次的な詩にあるのだと言えます。混在した機知の話を締めくくるに際しましては、私は実例を引きました称賛すべきこの詩人が他の作家に負けないくらいの真の機知の持ち主であり、実際、その他の面でも非凡な才能の持ち主であったのだと認めざるを得ません。

こういったテーマを扱っていますので、中には、私がドライデン氏の機知に関する定義を取り上げて寸評を加えるのではないかと期待なさっておられる向きもおられることと思います。ドライデン氏は素晴らしい思慮分別の持ち主ですので、失礼なことですが、残念ながら彼の機知に関する定義は、立派な作品一般の定義ほどには適切なものとはなっていません。彼の定義によりますと、機知とは「主題に即して脚色される言葉や思想の妥当性」ということです。もしその通りであるとすれば、私に言わせますと、これまで筆を執った中で最も偉大な才人はユークリッドだということになります。ユークリッドが執筆活動で活用した内容ほど優れた主題に即して脚色された言葉や思想の妥当性はほかには存在しなかったのは確かなところですが。読者のみなさんはこの定義が彼の述べる機知の概念に合致するかどうか考えて見て戴きたいと私は思います。もしその通りであるとする、ドライデン氏は優れた詩人であるだけでなく、カウリー氏よりも顕著な才人であり、ウェルギリウスはオヴィディウスやマルティアリスよりもはるかにひょうきんな人物であったことは確実です。

私がフランスの批評家の中で最も洞察力のある人物だとみなしているブワール⁸⁾は、いかなる思考も、十分な根拠のないもの、必然的なことに、基礎を

8) イエズス会士の文法家兼批評家ドミニク・ブワール(1628-1702)のこと。
彼の著作『精神的な作品の正しい考え方』は1687年に出版され影響力をもつ

置いてないものは美しくはならない、つまり、あらゆる機知の基礎は真実であり、分別が土台になっていない思考には価値がないのだということを示そうと努力してきました。また、ボワローもその考えを、彼の著述の散文韻文の双方で何度か繰り返し述べています。⁹⁾ これは当然なことであって、古典作家たちにはその優雅なまでの明快さが存分に伺えます。そしてまた、誰もそこから逸脱せず、ある思考をそれ自体の美しさで輝かすことができる非凡な才能に恵まれることを願っているのです。非凡な才能を手に入れ、この荘厳な明快さを造物主に捧げたいと願っている詩人は、仕方なく異質な装飾を物色し、機知であればどんなものでも取り込もうとします。私はこういった作家を詩の世界のゴート族とみなします。彼らは、建築界のゴート族と同様に、かつてのギリシャ人やローマ人にあった優雅な明快さにまで迫ることができず、途方もなく均斉を欠いた思いつきで埋め合わせをしようとしてきました。ドライデン氏はオヴィディウスのディードーからアイネイアース宛ての手紙について、次のような見事な意見を述べています。「オヴィディウスは（彼はウェルギリウスのディードーとアイネイアースを評して語ります）同時代なのですが、ウェルギリウスにならってそれを取り上げ、彼が新たに創造したディードーという古代のヒロインを著わします。彼女の死の直前に恩知らずの逃亡者ディードーに彼女に代わって手紙を口述します。オヴィディウス自身にとってきわめて不幸なことに、その件で彼よりもはるかに力のある人物と競う羽目になります。私は両者の翻訳をしたことがありますので、

た、1692年にはアムステルダムで改訂版が出版された。この作品の構成は、古典作家の審美眼を称賛するエウドクソスとまったくきらびやかなスペインおよびイタリア文学を好むフィラントとの間に交わされる4つの対話からなっている。

- 9) ボワローは1701年版の彼の著作集の序文で、「新鮮で素晴らしく非凡な思考とは何か。それは、無知な人たちが納得するような、これまで誰ひとり思いついたことのない思考でも、また、思いつくべき思考などではなく、誰もがこれまでに思いついていて当然の思考であって、誰かが最初に言い出す思考なのである。機知とは、誰もが考えることを、生き生きと上品にまた目新しく語ることなのである。」と記している。

私にはいずれが優れているかの審査員になれる資格があると思っています。恋の技法についての名高い著者オヴィディウスには何ひとつ独自性がありません。彼はすべて偉大な先人から借用しているのです。さらに悪いことに、彼は入手したものにひとつも改良の手を加えていないのです。造物主は彼を見捨てています。旧来の手法を押し付けられている彼は警句を頼りにします。実際には、このことが寛大な崇拝者に受け入れられ、ウェルギリウスよりも彼の方が評価されているわけです。』¹⁰⁾

ドライデン氏ほどの大家の支持がなければ、私には、読者は言うまでもなく、我が国の詩人たち大多数の嗜好はきわめてゴシック風なのだと述べる勇氣はないでしょう。ドライデン氏は詩の読者を三階級に分類したセグレ氏¹¹⁾の文章を引用します。セグレ氏は最初の階級に烏合の衆を入れます。彼はこの一群は教養という点からではなく、数と嗜好の粗悪さという点から扱います。「セグレは詩の読者を判断力に応じて三階級に分類しています。[彼はその気になれば、作家も同じように分類したことだろう。] 彼は最下層には、彼の言う「プチ・エスプリ」を配置します。これはちょうど我が国の劇場の天井桟敷の観客のようなもので、賢明な分別や優雅な表現といったものよりも駄洒落や奇想や警句を好む機知の殻や皮のような存在なのです。つまり、その他大勢の読者といえます。ウェルギリウスやマルティアリスが議員に立候補していたら当選していたことは確かです。ところが、こういったプチ・エスプリは一見いやに目立ちますが、その大半は数こそ多いものの市民権を獲得してないフランスのユグノー教徒ないしオランダの小百姓のようなものです。詩の世界では年間2ポンドの土地も所有してなく、投票権がないのです。作家たちも同じ水準であり、香具師の舞台上で上演したり、熊いじめの

10) カー編『随筆集』(1697)「アイネイアースの献身」。

11) カー編『随筆集』2. 223ff. セグレ(1701年死亡)はフランス社交界をリードしたランブイエ夫人のサロン「オテル・ド・ランブイエ」のメンバー。彼が翻訳した『アイネーイス』『農耕詩』の序文のウェルギリウス論は、ドライデンが引用している。

見世物小屋の進行役に相応しいのです。でも、こういった詩人が非常に有り難がられているのも事実です。しかし、彼らにとって悔しいことに、読者の持ち合わせの思慮分別が改善されますと（良書を読んだり、分別の或る人物との会話によって改善されるのですが）、すぐに見捨てられるといったことがよくあるのです。

このテーマを締めくくるにあたって、私は、ロック氏が前述の文章でとても有益な機知の源を明らかにしましたように、同じく数種類に枝分かれするそれとは正反対の源があるのだということを述べておかないわけにはいきません。観念の類似点だけでなく、対立点もまた機知を生み出すことがよくあります。これは、いずれ機会を改めて詳しく述べるができると思います。が、おちや逸脱や対照といったものに伺えるのです。

第63号 1711年5月12日（土曜日）

【アディソン】

もし、綺麗な婦人のお尻が魚の尻尾の形をしていたり、
馬の首筋に人の頭がついていたり、多種多様な獣の四肢が
様々な鳥の羽毛で覆われている絵を見たら、あなたはふきだし
画家の頭がおかしいのではと思わないだろうか。
そうなのです。文体が支離滅裂で、種類がまちまちで、
突拍子もないものを混在させている書物は物笑いの種となります。

（ホラティウス）¹⁾

長い間精力を費やしてきたテーマを頭の中から追い出してしまうことはとても困難なことです。その気が一切なくても、時々、自然にそのことが蘇ってくるのです。ちょうどそれは風がおさまっても波の揺れが数時間持続するのと同じ事です。

1) ホラティウス『詩の技法』1-8.

私が昨夜見た夢はそのためです。その夢とは私がこのところ紙面で扱ってきた偽りの、混在した、または真実の機知に関する一連の寓意物語だったのです。

思うに、私は怪物と魔術に満ちている国に流されたようでした。この国は偽りという女神が統治し、その自治区は偽りの機知という名称がついていました。野原や森や川には自然なものは何ひとつありませんでした。黄金色の花びらをつけていたり、ポピンレースを編んだり、宝石を産出する木がありました。泉の水はオペラの旋律を奏でており、牡鹿やいのししや人魚が水浴びをしており、その一方で、イルカや数種類の魚が、堤でたわむれたり、草地で遊んだりしていました。鳥の多くは嘴は金色で、人の言葉を喋りました。花は香や琥珀色の油や髪粉の匂いを発していました。花は互いに絡み合っていましたので、まるで刺繍のようでした。風には遠くから聞こえて来る恋人のため息とことづけがみなぎっていました。私はこの魔法をかけられた野原をあちこち歩き回りながら、目にする不思議な現象に対して独り言を口にせざるを得ませんでした。独り言を言っているとき、とても驚いたことに、私が歩む一步一步に不自然なこだまが返って来ることに気づきました。そのこだまは私が口にしたあることばを繰り返しながら、私の一言一句に賛同したり反駁するのです。この目に見えない相手と対話をしている最中に、私は暗闇の木立ちの中心部にゴシック様式の無数の目障りな彫刻を施した巨大な建物があるのに気づきました。早速そこまで行ってみると、それは「愚鈍」という神をまつる一種の異教の神殿であることが分かりました。神殿の中に入ってみますと、その神は僧衣をまとい、片手に書物、片手にガラガラを持っていました。右手には、「勤勉」が控え、その前のランプに明かりが灯っていました。左手には、「気紛れ」が位置し、肩に猿が載っていました。足元には、古色蒼然とした祭壇がありました。後から気づいたのですが、この祭壇は周囲の銘に合わせた形となっていました。祭壇には、詩句を記した切り紙の「斧」や「翼」や「卵」がいくつか捧げられていました。神殿には信者が沢山いて、彼らは思いつくまま、さまざまな気晴らしをしていました。

神殿の一箇所には、アナグラム連隊が陣取り、絶えず動き回っていました。右を見たり左を見たり、振り向いたり、二列になったり、持ち場を替わったり、身を投げ出したり、後退したりして、とにかく常に変化し、複雑な動きをしているのでした。

このアナグラム連隊のそばには、とても不均衡な人物たちで構成されるアクロスティックの部隊がいました。この部隊は三列縦隊になっていて、将校がそれぞれの縦隊の左端に陣取っていました。将校たちは全員端正で背丈は少なくとも6フィートはあり、三列になっていました。将校に挟まれるように並んでいるのが一兵卒で、この人たちはどう見てもまともには目が向けられないような小人や不具者や痩せぎすのみすばらしい格好をしていました。アクロスティック部隊の背後には、「年代表示銘」が二列になっていました。ここの将校は(時を司る神のように)片手に砂時計、片手に大鎌を持って、彼らが号令を出す兵卒たちの間に適当に散らばっていて、明らかにアクロスティックとは一線を画していました。

神殿本体と神の直前には、リポグラマティストであるトリフィオドロスがいたようです。²⁾ 彼はカントリーダンスの複雑なステップを踏みながらかわるがわる彼のことを追いつくが、追いつくことができない24名のの人たちと舞踏会を催していました。

神殿の西の端で非常に忙しくしている人たちを見掛けましたので、私は何をしているのかと尋ねました。すると、その一角には「判じ絵紋」という大切な雑誌があるのが分かりました。これはまったく違ったものを束ねて結わえ、ちょうど薪の束のように山積みになっていました。いかりやナイトガウンや木馬と一緒に結わえられているのです。そこで仕事をしている人の一人は、私がとても驚いているのを見て、この束の中には無数の機知があるので、よろしかったらご説明致しますよ、と私に話し掛けました。私は彼の親切には感謝しましたが、今は急いでいますからと返事をしました。神殿から

2) 第59号参照。

出て行くとき、一角にとっても愉快に笑っている男女の集団がいるのに気づきました。彼らは「韻捜し」³⁾というゲームをしているのでした。私が通りかかったとき二重押韻が聞こえてきました。彼らはそれで面白がっていたのです。

韻捜しをしている人たちのそばには、もう一組愉快的な人たちがいて、ひと間違いをして楽しむという遊びをしていました。この馬鹿げた間違いを引き起こすために、彼らはペアに分かれ、それぞれ、おそらく顔は少しも似たところはないのですが、頭のとっぺんから足の先まで同じ衣裳をまとうのです。こうすることで、時々、老人が少年に、女性が男性に、黒人が白人に間違えられ、さかんに爆笑となるのでした。私が思いますに、これは地口の仲間たちだったのです。ところで、頭が変になりそうだった私はこの魔法の世界から逃げ出したくなり、神殿を後にして、全速力で神殿の前に広がっている野原を横切って行きました。さほど進まないうちに、敵の進軍を知らせていると思われるトランペットと警報音が聞こえてきました。後から気づいたのですが、それは本当に私の思っていた通りでした。彼方にキラキラと輝く光が登場し、その光の中央にはとても美しい人物がいました。この人物の名前は「真実」でした。彼女の右側で進軍しているのは、男性の神で、矢筒を背負い、手には矢を数本握っていました。この人物の名前は「機知」でした。この二人の敵が接近したことで、偽りの機知側は仰天して言葉にもならないほどでした。女神本人が目下の神々や私が神殿で先程見掛けた部隊を引き連れて国境に姿を見せました。彼らは今では整列しており、敵を熱烈に歓迎する準備が整っていました。敵の進軍は非常に遅々としたものだったので、偽りの自治区の国境に住んでいる人たちは、中立を保ち、この戦闘結果に口を差し挟む意図で部隊をかき集める時間をもつことができました。

ここで私は読者に、私が述べてきましたこの魔法の国の国境には「混在した機知」という種族が住んでいたのだとお知らせしておかなくてはなりません。

3) 相手が出した語と同じ韻を持った語を見つける遊び。

ん。彼らは召集がかかると、とても奇妙な格好をして姿を見せるのでした。体に矢がいっぱい刺さっている男性もいれば、目が集光レンズの女性もいます。また、火の心臓の男性もいれば、雪の胸をした女性もいるのでした。この大部隊を構成しているこの種の怪物について語りだしますと際限がないことでしょう。この部隊は直ぐに崩壊し、二つに分かれました。一方は「真実」の旗じるしのもとに、もう一方は「偽り」の旗じるしのもとに身を寄せました。

偽りの女神は巨人で軍隊の数歩先を進みました。だが、真実の女神から発せられる眩しいばかりの光が彼女を照らし出すと、徐々に姿を消してゆくのでした。そして、しばらくすると、彼女は実体をともなうというよりも巨大な幻のようなものになってしまいました。ついに「真実」の女神がさらに接近すると、偽りの女神はすっかり痩せ衰え、真実の輝きに飲み込まれて姿が見えなくなってしまいました。そして彼女の居た場所には彼女の痕跡はつゆほども残っていませんでした。

偽りの女神が消え失せたのは、ちょうど日の出とともに、星座が希薄になり、星がつつぎつつぎに姿を消し半球全体が輝きを失うのと同じことなのです。女神だけでなく、この先導者に共感し彼女に仕えていた兵士たち全員も消え失せたのです。つまり、兵士たちも、彼女が消えるとともに、跡形もなく消え失せたのでした。同時に、神殿も倒れ、魚は水に戻り、野の獣は森に帰りました。そして、泉はサラサラという水の音を、木々は葉を、花は香りを取り戻し、辺り一帯は本来あるべき姿を取り戻したのでした。怪物たちが占拠している場所に森や川や野原や草地在蘇ったとき、私はまだ眠り続けていましたが、夢から目覚めたのではないかと思いました。

私の想像力をいたく掻き乱していたこの不思議な光景が消えたとき、私は「機知」と「真実」の姿をしっかりと検分しました。実は、この両者は別個に見ることはできないからです。この二人の背後には、頑健で体の引き締まった人物たちの一団が控えていました。「英雄詩」の守護神は、手に剣を携え、頭には月桂冠が載っていました。「悲劇」はイトスギの王冠⁹⁾をかぶり、血

に染まったローブをまとっていました。「諷刺」は顔に笑みを浮かべ、上着の下には短剣をかくしもっていました。「修辞」は稲妻、「喜劇」は仮面をつけていました。ほかに数名いて、その後には「警句」がいました。警句は、この遠征が始まるとき、敵側に寝返らないように、その位置に配属されていたのです。彼はひそかに敵に通じていると疑われたのです。私は「機知」の神の姿を見てとても畏怖すると同時に喜びをおぼえました。機知には非常に愛想の良い面と相手を射抜くような鋭い面が共に備わっていましたので、私は愛と恐怖をおぼえたわけです。私が言葉にならないほどうれしく感じながら彼をじっと見つめていますと、彼は私にプレゼントしようとして、肩から箆の矢を一本引き抜きました。だが、それを受け取ろうと手を差し出したとき、私は椅子にぶつかって目が覚めてしまったのです。

第64号 1711年5月14日（月曜日）

【スティール】

私たちはみんな見栄を張るために、貧乏暮らしをすることになる。

（ユヴェナリス）¹⁾

生活の中で最も留意したいことは、流行の力に惑わさないようにすることです。一般に広く行き渡っている習慣を取り入れることで、私たちが自然の法則や法律や良識に反した行動をとっている事例をいろいろ挙げることができます。だが、ここでの私の考察は、喪に服するのが流行となっている場合の私たちの振舞いを見て行きながら、それが人心にどんな影響を与えているかということに限定したいと思います。衣服でもって死者に対する深い悲しみを表わすという習慣は、悲嘆のあまり服装に対してきちんとした気配りができないといった人々の心からの悲しみにその起源があったことは確

4) イトスギは墓地にも多く植えられ、葉が暗くその小枝はしばしば喪の表象とされる。

1) ユヴェナリス『諷刺』3. 182-3.

かなところでしょう。その習慣が徐々に浸透し、悲しみに憂鬱になっている人々が気分に対応しい服装をすることで、普通に気晴らしをしているほかの人たちの仲間入りをしないことに対する申し開きとなったのです。従って最初これは本当に悲しみに暮れている人たちだけが採り入れました。彼らはこの服装をすることで、自分たちは悲しみにうんざりしているのだとか、また、ほかの人たちに誤解を与えるような屈託なく陽気なところは何ひとつないのだということを力説したのです。時がたつにつれて、称賛に値するこの悲しみの特徴が失われ、今では相続人や寡婦が喪服を着用します。遺族の装身具一式には莊厳さ、そして富裕な父親を亡くした息子の華麗な服装には隷属状態からの解放感しか伺えません。現在では、この種の悲しみの表し方が君主間の社交上の礼儀の一部となっています。お互いに兄弟と称している君主たちは、誰か親しくしている君主が亡くなると紫の衣服を着用します。自国の君主が亡くなると、廷臣やそれに準じる人たちは直ちに頭の先から足の先まで全身を悲しみに包み込みます。そこで、宮廷の取り次ぎ役のバックルひとつ見れば、死去した君主が宮廷とどの程度の関係にあったのかが分かります。この場合、立派な廷臣の服装や態度は象徴的です。終始、声は小さく、服装も非常に知的なものです。

人々に自分を実際以上に見せようとする気取りが行き渡りますと、誰もが宮廷の習慣を採り入れることになります。前日までごく彩色に飾り立てていた貴婦人が、喪に服するとなると、急遽黒ずくめになるのです。こういった気持ちになるのは、装身具を揃えるのになんの不自由もない資産家だけではありません。つまり、好き勝手なことができる裕福な人たちだけでなく、かつかつの収入の人までもがそうするのです。私が知っている年収90ポンドのある人物は、生来、自分は洒落者だと思っている虚栄心の持ち主ですが、君主の死去に対して大いに意気を感じます。彼はスペイン王が亡くなったとき黒服を新調し、ポルトガル王のときは、それを裏返して作り直しました。そして、今では、皇帝の死去を悼んで自室に閉じこもっています。²⁾ 彼は手堅い儉約家であり、小国の君主の場合は鉄灰色の服につける黒ボタンをひとつこ

しらえるだけです。さらに、彼がガゼット紙で称賛している功績のあった君主の場合には帽子のクレープ喪章を付け加えます。³⁾ところで、君主の死去に際して、どのようなお悔やみが述べらるるとしましても、正真正銘の哀悼者は、呉服商、絹商、レース商、そして婦人帽製造人なのです。慈悲深く立派な君主なら、自分の死去ひとつで数多くの人たちが窮状に陥るのだと知れば、自分の死去について非常に心配になり、自分の逝去を告知するときには、弔慰を表する者は王室関係者だけに限るようにとの指示を出した方がいいと考えることでしょう。誰もが喪に服することは、野蛮な国々で行なわれている王の埋葬に同行させるために奴隷を殺害するといった儀式とさして変りがないと思うことでしょう。

私は馴染みのコーヒーハウスに時々顔を見せる人物⁴⁾のことをどう考えたらいのか分からず何ヶ月にも渡って非常に悩みました。この人物はいつも「うん、諸国の君主みなさんお変りはありません」という感想を述べて新聞を閉じるのでした。尋ねると、ポストマン紙のウィーンからのニュースによると、有難いことにドイツの諸侯はみなさんお元気なのですよ、との返事がありました。バルセロナからのニュースでは、スペインでは新女王と万事がうまくいってるとのことでした。いろいろ聞いていると、万国の君主に忠誠を尽くすこの人物は、絹とりボンの卸売商であるのが分かりました。彼は織工つまり職人を雇う場合には、年季契約に「本契約の実効は契約期間内に外国の君主が亡くならないことを条件とする」という条項を挿入するのが彼の方針のようです。誰もが喪に服するようなことになると、衣服関係の多くの商売は、この愚行が行なわれている間当座の払底に困ったり、間もなくこの愚行が行なわれることになるかも知れないとびくついたりするようなことに

2) スペインのカロス2世は1700年の11月に、ポルトガルのドン・ペドロは1706年12月に、神聖ローマ皇帝ヨーゼフ1世は1711年4月17日にそれぞれ死去した。

3) スティールは1707年から1710年10月まで、官報『ガゼット』に記事を書いた。

4) この人物は『タトラ』に登場する近親者のことよりも王室の安寧を気にかける政治に大いに関心を寄せる室内装飾業者のことを想起させる。

なります。気ままな出費（これは不足にあえいでいる人々を馬鹿にしていることなのですが）の罪滅ぼしは、貧しい人々が必要としているものを補ってあげることなのです。ところが、宮廷風の服喪の習慣を採り入れるといった気取りをやめて何か善行をするどころか、みんな気取るあまりおかしくなっているように思えます。そのため、ある宮廷が払う心からの弔慰も、効果も効力も発揮しません。ある外国の公使にしてみると、自国の主君の逝去にさいして（豊かで何不自由のない）ある国の宮廷が、非常に愉快的な国民性にもかかわらず、壮麗で華美な点をすべて排除すれば、その国の全国民が喪に服しているのを目にするときよりもはるかに弔慰を払ってくれているとみなすことでしょう。商人の奥さんが身内を亡くしているのではと氣遣っているとき、心を決してどなたがお亡くなりになったのですかと尋ねて、彼女の口からオーストリア家の方だとの返事を聞くのは非常に馬鹿げたことなのです。君主というものはほかの人たちと違って高尚な存在ですので、その権限があれば別ですが、凡人がその仲間入りをするのは身のほどをわきまえない差し出がましい行為なのです。こういった行為は、壮麗さをふんだんに持ち合わせているにも関わらず、親交のあった宮廷に対して弔慰を払うために喪服をまとい人生の無常感を表明していると思われる宮廷と自分が幾分関係があるのだということを示そうとする行為にすぎないのです。⁵⁾

5) 国家礼典を司る紋章院総裁による服喪規定が4月28日付け『ガゼット』に掲載される。「神聖ローマ皇帝の崩御に際し、女王陛下は来る29日日曜日より喪に服されるとのご意向であられる。貴族ならびにその他一同の者は、黒服、無地のリンネル、黒剣、白の手袋を身につけること。貴族夫人ならびにその他の婦人は、絹の黒服、平織りのリンネル、白の手袋を身につけること。」

第65号 1711年5月15日（火曜日）

【スティール】

デーメートリウスとティゲリウス、身のほどを知らなさい。

立ち去って子供たちと一緒に泣き言を言っておればいいのです。

（ホラティウス）¹⁾

機知の真偽についてこれまで長々と説明してきましたが、この労苦も具体例について考察しないと無駄になってしまうように思われます。上流社会の人たちにとって、機知が最も目立つ場所は劇場です。そこで、本日の紙面では、劇場での機知の効用について考えてみることにします。機知の好みが作家たちの作品に影響を与えるように、劇場での機知の適用は紳士諸兄のマナーに強い影響を与えます。おそらく、長年に渡って人々から大きな称賛を浴びてきています作品を組上に載せることは、「観察者」の本分から掛け離れているとは言えないものの、非常に僭越な所業であるように思われるかも知れません。だが、称賛したり非難するときには、私は常に理性と真実と自然をその判断基準に据えます。判断基準が私の考えに合致する場合には、大多数の評価は私の意見と一致し、合致しない場合にも、大多数は私を支持することになります。

前置きはこれくらいにしまして、非常に称賛されています作品をいくつか調べて、それらが現在人々の想像力に結実しています価値があるかどうか考えてみたいと思います。

具体的な作品を見ていく際には、非常に有名な作品に限定したいと考えます。そこで、本紙では『サー・フォプリング・フラター』²⁾を取り上げます。

1) ホラティウス『諷刺』1. 10. 90-91.

2) サー・ジョージ・エサリッジ (1635?-91) の、いわゆる王政復古期の風習喜劇の代表作とされる『伊達男』(1676) のこと。この作品は、サー・フォプリング：シバー、ドリマント：ウィルクス、メドレー：ミルズ、父ベルエアー

この作品が広く受け入れられていますのは、これが上流階級を扱った喜劇の様式を踏襲しているからです。ドリマントとハリエットは紳士淑女であり、もし彼らが身分も低く生まれが卑しい人物だったら、この作品の評判は極めて不当なものとなります。

立派な紳士なら、行状が誠実であり、言葉づかいが洗練されているのは当然のことです。ところが、この作品の主人公ドリマントの腹の中はどう見てもならず者のそれであり、言葉づかいは無骨者のそれなのです。ドリマントが崇拝する友人にベルエアーという人物がいます。確実に友人よりも機知に富むドリマントは、彼が結婚するまでは貞淑だと考えている淑女との結婚をその友人に勧めるのを道理に合ったことだと考えます。そのとき、彼は文句無しの立派な紳士ですので、この淑女のことは彼の重荷にならざるを得ません。ラブイット夫人に対する欺瞞や彼に捨てられる彼女の苦悩を打ち負かす粗野な振舞いもまた、ドリマントの人の良さだけでなく、誠実さを示すしるしなのです。立派な言葉づかいということでは、彼は肥満タイプと思われるオレンジ売りの女のことは「はらわたの詰まった太っちょの女」と呼び、「やあやあ、二重腹」というひどい言い方で迎えます。何ひとつ面識の無い地方の淑女のことを、(誰もその根拠は分からないのですが)、彼は「命を賭けてもいいが、少々ぶざまな田舎者で黒髪は50本足らずしかないこの女性は、髪を薄さをカールした白髪の巨大な鬘でカバーしているのだ。それで、昔の芝居のボックス席の最前部に陣取ると粹に見えるかも知れない」と言います。なんとわざとらしい無意味なきまり文句がならんでいることでしょう。³⁾

寛大さということでは、ドリマントは哀れな従僕に向かって、「きちんと仕えないと」解雇すると言い、「お仕着せを剥ぎ取ってしまう」という尊大

：ペンケスマン、息子ベルエアー：ブロック・ジュニア、靴屋：ボウエン、ラブイット：オールドフィールド夫人、ベリンダ：ロジャーズ夫人、ハリエット：サントロウ夫人、エミリア：ポーター夫人の配役で、4月20日、ドゥルレー・レイン劇場で上演された。

3) この段落で引用されている台詞はすべて1幕。

な言葉づかいをします。⁴⁾

ところでハリエット夫人はどうかといいますと、彼女は目の前にいない母親に対して従順である必要はないと冷たく言い放ちます。侍女のビジーはこの母親の優しさは実に素晴らしく、「奥様はお嬢さんに会えてとても満足していらっしやいます。奥様にはお嬢さんの過ちをしかることはできません」⁵⁾と語ります。この機知に富んだ娘の美しい淑女には、善良な母親に対する尊敬の念は少しもなく、母親が立ち去るときに示す素振りをあざけり、「あそこにいる私の哀れな母親の取り乱しようったら」「ほらほら、頭はぐらついで、目はひきつり、下唇は震えているわ」⁶⁾と言います。だが、「彼女は想像通りの激しい気性の持ち主だが、普通の女性には見られないほどの機知があり、意地があり、表情には意外と思えるほどとりすましたところがある」⁷⁾ので、こういった彼女の粗野な点はすべて解消されます。それにまた、作者エサリッジは彼女を主人公ドリマントの結婚相手に相応しい人物にするために、彼女に彼女の結婚観をととても知的に語らせます。「私はあの人のことは我慢できると思いますわ。それに、道理をわきまえた女性なら誰だって、夫というものはそんなものだとか分かっていてののですもの」⁸⁾と彼女は語るのです。心配で娘から目を放せない馬鹿正直なだけの母親のもとで育てられた彼女がどうしてこれほど洗練された人物になったのか不思議なくらいなのです。

この作品では、真面目で尊敬に値する人たちの注意を引くことですが、あらゆることに対するだらしない様子がとても上手く描かれているようです。だが、立派な紳士に秩序と品位をことごとく踏みにじらせているわけではありません。ドリマントに関して言えば、彼はフォプリング以上の洒落者です。彼はベルエアーについて二人の良好な関係がお互いのためになるのだと言い

4) 1幕1場235行。(行数はアーノルド版による、以下同じ)

5) 3幕3場101-102行。

6) 4幕1場328-332行。

7) 1幕1場137-139行。

8) 3幕1場47-48行。

ます。彼はこの友人のことを語るとき、二人一緒にいることで「女性たちは彼の分別を見直し、私に対する評判も好意的になるのだ。そして、彼は非常に良識のある人物、私は非常に礼節をわきまえた人物ということになるのだ。」⁹⁾と言います。

この名高い作品そのものは、立派な作法、良識、世間並みの正直さといったものとは対極にあります。この作品では、美德や純真さがことごとく崩壊していますが、喜劇の長所ということを考えると、本当に立派な紳士は靴屋ではないかと私は思います。なぜなら、彼女自身も最下層の人物とは言えませんが、果物売りの女が語るところでは、この靴屋は無神論者のようですから。彼女はドリマントの気の合った友人の紳士について、「この町には、靴屋は別ですが、この方ほど不信心な方はいません」と語ります。¹⁰⁾靴屋がこの芝居の主人公を気取っている様子は、彼が細君との生活について述べる場面を見ればさらに明らかになります。彼は「我が輩ほど紳士に相応しい暮らしをしている方はこの町にはどなたもいらっしゃいませんよ。我が輩は家内の行動なんか気にしやぁしませんし、家内もまた我が輩のことをとやかく問いただしたりしやぁしません。我が輩たちは互いに礼儀正しい口の利き方をし、心の底から憎み合っているのです。一緒に寝たり酒を食らったりするのは低俗なことだから、我が輩たちはベッドは別々にしてるんだ」と言います。¹¹⁾「一緒に酒を食らう」という台詞はまるでドリマント自身の口から発せられたかのようにです。ドリマントは人間性をこの上なく醜悪なものとし、根っからの不信心者であるために、その埋め合わせとして、最後に財産贈与にあずかれない憂き目にあっているのだと、私は考えます。

この作品全体について率直な意見を述べますと、無邪気さや美德といったものが一切感じられないために、この喜劇を見る場合には、陽気さや笑いよりというよりはむしろ悲哀や憤りを誘われる方が多くなるのだと思われます。

9) 1幕1場399-402行。

10) 1幕1場81-82行。

11) 1幕1場282-286行。

とはいえ、これが現実だと認めないわけにはいきません。ただし、極度に腐敗墮落した現実なのだということを。